

J **apanese text**

2017年 秋/冬号 日本語編

デザイン

デザインラボ

文様

—— **手毬の宇宙**

撮影＝西山 航 手毬制作＝荒木永子

文＝原 研哉

p.046

鞠とは「丸い」の古語「まる・い」から派生したといわれている。確かにボールは丸くなければならない。ボールが球体に近づいていないと球技という技能は成立しないし、技術の向上も起こらない。人々は科学技術の進歩とともに理想に近い球をつくるようになり、球技を楽しみつつそこに物理をなす宇宙の摂理を感じとったに違いない。

ただ、ボールの誕生によって発展したのは「球技」だけではなかった。日本の「鞠」をみるとそれがよくわかる。びっしりと複雑な幾何学文様で覆われた鞠は宝石のようであり、これを蹴って遊ぼうという気持ちは湧いてこない。球体が発する、運動性とは異なる数理に導かれて、日本の女性たちはその表面に糸による幾何学文様を発展させた。世界が球と戯れている間に、アジアの果ての島国ではその表面にせつせと刺繍をしていた。その色と形の絢爛さをご覧いただきたい。そこには、日本の女性たちが慈しんだ、繚乱たる宇宙の綾がまさに顕現しているのである。

手まり

7世紀には原型が中国より伝来したと考えられ、江戸時代には遊び道具や祝い事の贈り物として、現在のような手芸が施された手まりに発展。糸の素材や中央の芯地は地域ごとに異なる。文様はまず土台まりの表面に北極点・南極点を定め、経緯で均等に分割していく。更に赤道と経緯の交点を新たな北極・南極点とし、そこから経緯を引くことで、より細かく均等な交点を作り出す。これら点と点を結ぶことによって、ほとんど無限ともいえる図柄が球面上に創出される。

写真左より：

《無題》32面体地割、五角つなぎに菊かがり文様

《陽気な手まり ポリフォニー》10等分組合わせ地割、東ちぢみ文様

《Fleurir 開花する／La Fleur 花》10等分組合わせ地割、五角つなぎに菊かがり文様（白ピンク／白）

《花ひらいて》92面体地割、松葉かがり文様

すべて「讃岐かがり手まり」作家、荒木永子さんの作品。讃岐かがり手まり保存会の代表を務め、香川の手まり文化や技術を広く伝えるとともに、自らの個性をまじえた現代的な柄や作品も発表し続けている。「讃岐かがり手まり」は草木染による木綿糸の淡い色合いと、芯にモミガラを使うことが特徴。昔からある伝統文様に加え、作家たちの創意工夫で今日もさまざまな文様が誕生している。

eiko-temari.jp

原 研哉（はら・けんや）

デザイナー。「もの」のデザインと同様に「こと」のデザインを重視して活動中。ものの捉え方や価値観を更新するプロジェクトを多数手がける。長野オリンピックの開・閉会式プログラムや、愛知万博の公式ポスターなど日本文化に深く根ざした仕事も多い。2002年より無印良品のアートディレクター。2017年にオープンしたJapan House プロジェクト総合プロデューサー。著書に『デザインのデザイン』、『白』ほか多数。

www.ndc.co.jp/hara/

建築

—— **Funが溢れる駅前広場**

写真＝阿野太一

文＝佐野由佳

p.048

「これ、何だろう？」そう思ってもらうことが大事だったと佐藤オオキさんは話す。

佐藤さんが率いるデザインオフィス nendo の設計で、奈良県天理市の天理駅前に2017年4月にオープンした駅前広場だ。名前を「CoFuFun（コフフン）」という。天理市内に1600基も残っているという古墳にヒントを得た。敷地は約6000㎡。白い円形の建物がそれぞれ、街の総合案内所やカフェ、レンタサイクルショップ、屋外ステージや、なんとトランポリンなどになっている。しかし施設そのものはもちろん

だが、仕掛けの肝は「目的を定めない“余白”にあります」と佐藤さんはいふ。階段状のスペースでは、腰掛けてくつろいだり遊んだり。路地のような隙間でもイベントを開いたり、来た人が思い思いに居場所を見つけられるようにできている。オープン以来、子どもからお年寄りまで、街の人から観光客まで、「これ、何だろう?」と思ったさまざまな人で、予想をはるかにこえたにぎわいを見せている。

もともと何もない広場だった駅前を活性化させることで高齢化や働く女性の支援など、街が抱える課題を解決したい、と市長自ら音頭をとったこのプロジェクト。ネーミングの由来どおり、集まる人たちと一緒に市長も楽しんで (have fun) いるという。

建築本体はプレキャストコンクリートできている。ピザの一切れのようなピースを 36 個つなげると、ひとつの円形ができるように設計されている。コフファンは街にこんなに子どもがいたのか、と驚くほど子どもたちに人気だという。子どもがいるとお年寄りも集まってくる。49 ページ下の写真・右手前の盛り上がった部分がトランポリンになっている。インスタグラムに映える場所ということもあり、若い世代からも支持を得る。

cofun.com
www.nendo.jp

書棚

—— 匠巻の木造建築本

撮影＝伏見早織

文＝編集部

p.050

「石の建築ならイタリア、木の建築なら日本を見ればいい」。建築史家・藤森照信さんによる前書きだ。イタリア大理石の質の良さと種類の多さは世界屈指だが、木なら日本も負けていないという。建築に向く樹種の豊富さ。179 種類にも及ぶという大工道具の数からもうかがえる加工精度の高さ。そしてそれら建築を大事にする気持ち。その結果、木の建築は驚くことに 1000 年という永さを持ちこたえる。パーツを交換しながらも、全体として再生する。

この本はそうした長き時代を越えてきた、それぞれが個性的な木造建築を 23 箇所紹介している。写真はすべて建築写真界の革命児・藤塚光政さんが撮影。建築界の最強ユニットによる語り写真、そして巻末につけられた構造学者・腰原幹雄さんによる解説、斬新で力強い本のデザイン。すべてが相まって、実際にふたりが自分一人のために全国をガイドしてくれているような気持ちになる。木への愛が、読む者をワクワクさせる。そして実物をこの目で確かめたいくなるのだ。

(上)

朱塗りの手すりなどの遊び心に満ちた横浜・臨春閣。数奇屋造りの極み。

(下)

ページに斬新に配置された平等院鳳凰堂。その幽玄ながらも力強いさまは、まさに「天上の建築」。

『Japan's Wooden Heritage:

A Journey through a Thousand Years of Architecture』

著：藤森照信・藤塚光政

翻訳：ハート・ララビー

出版：出版文化産業振興財団 (JPIC)

204 ページ 5100 円

日本語版 (2500 円/世界文化社・刊) より翻訳